

環境生態学科

丸尾雅啓

今年には琵琶湖での定期観測・採水が軌道にのり、卒業研究、修士研究に従事する学生が増え、研究室の活性があがった1年であった。分析データも多く出るようになったが、それを解釈する知識・頭脳については自分も含め、まだこれからである。

もちろん、議論に耐えうる信頼性を持ったデータが出始めたのはうれしいことである。例年、観測目的で海外に出張すること（おもに観測船）が多いのだが、本年はお休み。代わりというわけではないが、Pacifichem2000（環太平洋国際化学会議：12/14-19ハワイ、ホノルル）に参加、暖かい土地で、南極の氷の分析法を発表させていただいた。

それにしてもやはりあつという間に年報の提出期限になっていた。

村瀬潤

- 陸水土壤学事始め -

奉職して5年、故あって本学を去ることになりました。もともとの専門である土壤学から陸水学へ、まったく異世界への転身であり、この5年間は戸惑いや悩みを抱えた毎日でしたが、尊敬するある先生の「まずは研究対象に愛情を注ぐことである」という言葉を胸に琵琶湖研究にたずさわって来ました。よくよく考えてみると、来学前まで研究対象としてあつかってきた水田も陸水の1つに他ならず、この2つの陸水環境の土壤（堆積物）を研究する機会に恵まれたことを幸運に思います。関西と中部の文化の境である彦根に住み、環境科学という境界領域分野に籍をおき、そして一土壤学者として陸水学を学んだ -、この隙間感覚を自らの財産として今後の研究・教育活動に精進していきたいと思えます。「ちゅうとはんぱ」と言われぬように…。私にとってここが「陸水土壤学」の始まりです。

荻野和彦

わたしのこの一年 - 森と水と人 -

湖西の朽木村は山深い村である。谷筋には手入れの行き届いた美しい、亭々とそびえるスギの古い造林地が、斜面にはなお若い造林地が広がる。人里に近い落葉広葉樹二次林は里山だ。奥山にはスギ混じりの広葉樹林が美しい。この山には人が入っているという印象を与える。

Kさんは滋賀県でも五指に入る篤林家のひとり、持山の45%が人工林である。よく手入れされた樹下植栽を褒めると「人工林を増やすことはもうやめようと思う」という。意外だった。

何故か。

よかれと思って、山にスギの植栽を続けてきた。県もそれを奨めていた。が、50歳になったときふと気になっ

た。逆の結果を招いたのではないかと。谷の水が減った。魚が後退した。上流にある朽木の山が水源涵養の役目を果たしてないのではないか。疑念がよぎった。スギ、ヒノキ、マツとナラ、ケヤキ、ブナを鉢に植えてみた。前者は1日200ccの水を、後者は実に1,000ccを吸い上げた。山でもスギ林の土はバラバラだった。ブナ林の土は根が詰まっいて、細根が多い。土壌保持力が強く、保水力が高い。歴然とした結果だった。

Kさんは力説する。

針葉樹一斉林の谷の水が少なくなったのは、林業の責任である。天然林にならって、スギとケヤキ、ナラを混植することが必要である。人工林率が80%、90%などということ自慢してはならぬ。天然林も二酸化炭素の吸収、固定に優れたものを持っている。山の木の活力を引き出せるように、手入れを怠らせずに、個々の木の成長を促進するようにしなければならない。

Kさんの山を見る目は確かである。この人になら、山の未来を托してもよい。

國松孝男

1 教育

今年度からこれまでのslide projector に替わってPowerPoint-digital projectorによるスライドショーを使った視覚的授業を中心に行った。

【授業】担当授業科目には変更はなかった。

学部2回生：環境化学、環境化学実験、自然科学特別実習 / 、環境フィールドワーク

3回生：水環境管理学、環境フィールドワーク / 、専門外書講義 /

大学院修士：物質循環論、集水域環境論

京都府立大学人間環境学部環境情報科学科2回生：水質保全論（夏期集中）

【演習・FW】FWと専攻学生の研究テーマは次のようである。

学部4回生：津村絵里子（林地の地質と水質）

3回生：木村由紀子・田淵美穂子・藤原裕子（昭和40年を境とする農業の変遷）

尾坂兼一、廣田麻美（昭和40年を境とする林業の変遷）

修士2回生：井上大祐（ヒノキ造林地と落葉広葉樹二次林の水質形成機構の比較）

1回生：泉 浩二（土砂流出の多い森林からの物質流出の特徴）

研究生：金桂花（中国杏林環境工学院卒業：処理水休耕田浄化、玄宮園魚躍沼の汚濁調査）

2 研究および学会活動

大津市で2000年10月24～27日に開催された第4回底質環境評価国際シンポジウム(The Aquatic Ecosystem Health and Management Society)で、Estimation of Material Transport from Mountainous Forests in Japanについて発表した。国内での学会では10月9～11日に京大で開催された日本水環境学会シンポジウムで國松が発表し、2001年3月10日に本学で開催される日本陸水学会関西支部会では泉が、同14～16日に岐阜大学で開かれる日本水環境学会第35回年会では井上と津村が発表する。

日本水環境学会ノンポイント汚染研究会農林地部会の主催で9月29日～10月1日に「ワークショップin屋久島」を主催し、全国の教員・大学院生・学生19名が参加した。本学からは泉が参加した。

学内外との協同研究は、琵琶湖研究所との「森林伐採の影響」および森林センターとの「ヒノキ林における水質形成機構」についての協同研究を本年も続け、新たに滋賀県農村整備課の委託調査「田んぼで浄化」、彦根市観光課委託「名勝玄宮楽々園魚躍沼水質調査」を実施した。

3 社会活動

環境庁水質保全局水質管理課と日本水環境学会による「湖沼環境保全対策技術検討委員会」、建設省近畿地方建設局による「近畿地方ダム等及び琵琶湖管理フォローアップ委員会」、琵琶湖・淀川水質保全機構による「面源負荷削減対策委員会」、水資源開発公団丹生ダム建設所による「丹生ダム生態系保全検討委員会」の各委員を継続し、新たに滋賀県浄化槽協会「事業検討専門委員会」委員長、岡山県「児島湖総合対策専門検討委員会」委員を勤めた。

4 研究論文

Kunimatsu, T. and Hamabata, E. (2000) Estimation of Material Transport from Mountainous Forests in Japan, Proceeding of 4th International Symposium on Sediment Quality Assessment held by the Aquatic Ecosystem Health and Management Society, at Otsu, Japan, pp. 94-95.

伏見 碩二

- 新世紀を迎えるにあたっての課題 -

伊吹山の初冠雪は2000年12月6日でした。例年より1ヶ月ほども遅いとのこと。今年も、また、暖冬になりそうです。このように、日本でも温暖化が現実的になりつつあるのに、残念なのは、その防止策を話し合う昨年末のハーグ国際会議（COP6）で合意がえられなかったことです。特に、温室効果ガス削減に熱心なヨーロッパ各国と森林吸収による便法を用いた日本などのアメリカ・グループが対立したのが原因とあっては、3年前の京都会議の主催国としては面目丸つぶれです。ますます、グローバルな責任が問われています。

昨年もまた、有珠・三宅山噴火や東海豪雨などをはじめ世界各地で異常地象・気象がおこりました。まさに、自然現象とともに社会現象の大変動期です。日本をはじめ地球全体が異常さを多分に示しながら、新世紀へと雪崩れこんだようです。行き先の見えぬ大変動期を乗り切るための智慧を、いかにフィールドから編み出していくのか。具体的課題として、昨年訪れたモンゴルはフブスグル湖の水位上昇や琵琶湖では水位低下なども考えたい。

ところで、例年のように学生40人ほどと余呉町の積雪調査に行ってきました。年度末の実習です。滋賀県最北の地である栃の木峠に向かうにつれ、みるみると雪深くなっていました。今冬の降雪は滋賀県北部に集中する「北雪」で、栃の木峠の積雪は170 でした。今年初めまでの暖冬とは一転した厳しい雪景色のなかで、学生たちは雪を掘って観測したので、帰りのバスではぐったりと寝こむほどのしんどい調査になりました。今年の雪の降りかたも異常で、まさに大変動期を象徴しています。「大変動期を乗り切るため」には、柔軟性とともに多様性がキーワードになるのではないのでしょうか。

三田村 緒佐武

昨夏、星に手がとどく国モンゴルの湖沼調査へ出かけた。モンゴルには数百の湖があるといわれるがその大部分は中西部の乾燥地帯に点在する。研究室にいるモンゴルからの留学生ハドバートル・ダリジャブ君は、本学大学院修士課程をこの3月に修了したのち、モンゴル環境省自然保護課に就職が決まっている。市場経済の嵐が吹き荒れる母国では、帰国したのち日本と同じ研究が持続できるとは思えない。せめて母国の湖のさまざまな顔を科学的に少しは理解しておいてほしいと、彼とのモンゴル湖紀行3000 を計画し

た。ウランバートルで求めた50万分の一の地形図や現地の人からの情報を基に調査対象とした18の湖は、琵琶湖より数倍も大きいもの、湖からの流出河川のある解放湖や湖への流入河川のみの閉塞湖、遊牧民の生活の場となっている草原の湖や高度が2000mを超える山岳の湖などまでさまざまである。

ウランバートルよりチャーターした新しいロシア製観測車には、私たち2人の他に調査を手伝ってくれるハドバートル君の親族2人と雇った運転手の5人が、それぞれがいつのまにか指定席をつかった。車の後部には、日本から持ち込んだ観測機材やテントなどとともに一月分の食料と水が積まれている。その窮屈さと座席の硬さはお世辞にも快適な旅とはいえない。鉄のかたまりのような観測車でも悪路のために修理に明け暮れ野宿を余儀なくされたこともあったが、その副産物として、一点の明かりもない大地からまさに満天の星空との会話を楽しむひとときも体験できた。車は道なき道をさまよいながらいつの間にか気がついてみれば目的の湖へたどり着く。そのナビゲーション技術は、さすが五感に頼る生活者の知恵のたまもであると感動した。3週間に及ぶ5人の共同生活は、あの何もかも飲み込んでしまいそうな壮大な風景に溶け込み、時が止まるがごとく遥かなひとときであった。

調査した18湖は、観測車が湖岸まで容易にたどり着くことができるほどいずれの湖も沿岸湿地と水草帯が貧弱であった。また湖水の塩分は琵琶湖より甘いものから海水より辛い湖まであり、その主要成分の化学型にも湖ごとに個性が認められた。水の透明さは摩周湖のごとくから諏訪湖のごとくまで観察され、その栄養は貧栄養から富栄養までであった。また、そこに棲むプランクトンにも湖ごとに種構成が異なっていた。これら種々の湖沼型が形成された背景は、湖とその集水域の地理的、地質的、気候的など自然環境要因とともに、モンゴル遊牧民の生活形態と湖との関わりにも大きく起因することが想像される。

遊牧民の生活が湖を特徴づけていると確信したのは、その日の湖巡りを日没とともに終えたのち、遊牧民のゲルを訪れ夕食のための牛糞の炎あるいは一夜の寝床を拝借することが多かったためであろう。水道・電気・ガスを持たない遊牧民の生き方と、彼らの家族である牛・馬・駱駝・ヤク・羊・山羊までが湖岸で湖の水の恩恵を受けながら草原の大地に踏ん張って生活している影響であるに違いない。わずか一月たらずの共同ゲル生活から、遊牧民が、先住民のごとく生活者としてのたくましさや優しさ、そしてなによりも自らの生き方に誇りをもっている頑固なまでの美学を感じることができた。そんなモンゴル遊牧民の生活は、私たちがここ数十年の間に置き忘れてしまった大切なもの「いのちとこころ」を私の魂に突き刺すがごとく痛烈に教えてくれた。今、環境問題を根本から見直すための哲学の原点を、東洋思想あるいは先住民の生き方から学ぶべきだと叫ばれるが、まさに、今回のモンゴル湖紀行は、自然と人の生き方の多様性が地球のあるべき姿とっていかに大切であるかを考えさせてくれた。

近 雅 博

2000年にはパリの自然史博物館に行った。パリの自然史博物館には19世紀から20世紀前半にかけて活躍した昆虫学者で標本の蒐集家でもあった R. Oberthür の甲虫コレクションが収蔵されている。Oberthür の死後彼の蝶のコレクションが大英博物館の自然史部門に購入されてしまったのに慌ててフランス政府が残りのコレクションを購入したという経緯があったらしい。私が研究している甲虫目のクロツヤムシ科のタイプ標本も Oberthür コレクションにたくさん含まれている。それでクロツヤムシ科の分類の本格的再検討をするためにはどうしても Oberthür コレクションを実際に検討することが不可欠となる。パリの自然史博物館には知り合いのクロツヤムシ科の専門家がいて、これまでもタイプ標本を貸し出してもらっていた。ただやはり直接コレクションを見るにこしたことはない。パリの自然史博物館の昆虫部門はカルチュエラタンにある中途半端に古ぼけた2階建ての建物で、ロンドンやウィーンのような格調

高い巨大な建物とは全く違い拍子抜けしてしまった。これはひとつには、展示のある建物と研究部が別になっているためと思われる。ただし、建物はさえないが標本の数はやはりすごく、ヨーロッパの分類学の歴史的蓄積の厚みに強い印象を受けた。

また、2000年はメキシコにも調査に行った。メキシコの生態学研究所にはアメリカ産のクロツヤムシ科の権威がいるのだが、系統学について彼と共同研究をおこなう目処がついたのが一番の収穫だった。メキシコ南部で森林が残っている場所を見つくるって連れて行ってもらったのだが、何も知らずに行ってみたらマヤのパレンケ遺跡の裏山だったので感動した。

上野健一

環境科学部中央のB0棟2階に“学部情報室”という部屋がある。今回は、本誌面を借りて、この部屋における学生諸君との取り組みについて紹介したい。開学まもなく、計画学科の井手さんよりこの部屋の整備に関する依頼を受けた。“情報室”というと007が出てきそうな名称であるが、要は学部共通の“学生情報演習室”で、各学部で同様の部屋を図書情報センター付き予算で整備するらしい。そこで相談のうえ、1) 教員用メールサーバーを管理する、2) なるべく多くのPCを導入して学生の自習室として利用する、3) PCを使用した少人数の授業にも使用する、という基本路線に従い予算内で備品を整備した。内容は20台のPC、2台の白黒プリンター、パーティション、その他の机・椅子類である。当初、サーバーを鍵付きの小部屋で区分けする案もあったが、あえて現在のオープンなレイアウトとしている。さて、“もの”は入ったが、そもそもPersonalなComputerを学部共有としてどのように“管理・運営”していくのが一番の難点であった。残念ながら私自身は情報教育の専門家ではなく、かといって学部専門の技官や実験助手がいるわけでもない。PCの操作や部屋の利用に関するトラブルが不特定の学生諸君から連日寄せられては仕事が上がったりである。そこで、まず私が実施したのは工学部・人間文化学部の情報室を見学させていただき、利用形態を勉強する事であった。その上で、思い切った発想の転換をはかる事とした。それは、“大学は実践教育の場である。共通自習室の利用方針は学生に決めてもらい、その中で直面する様々な問題もひっくるめて教育の場としよう。”という考えである。具体的には、“有志学生を募り、そこで整備・運営の方針を決める。彼らの自主性・アイデア如何で利用形態の善し悪しが決まり、それがそのまま利用者である学生の利益に還元される。”という仕組みである。逆の見方をすれば、このような理屈の上で私本人は何にもしなくて良い事になる。そのような無責任では困るので、運営の基本路線、諸処のクレーム、予算要求、物品購入は(あたりまえだが)上野が責任を持っている。

前置きが長くなったが、この5年間での物品の整備と運営方針を以下に紹介する。

<整備履歴>

1996年度：OSをWindows 95としてPC20台でスタート。授業用のスクリーン・液晶プロジェクタ購入。

1997年度：PCサーバー機を導入。カラープリンター・掲示板を整備。メール利用を可能とする。

1998年度：ネットワーク化の準備。図書の整備。

1999年度：OSをWindows NTとし、ネットワーク化・共有ディスクの運用を開始する。カラープリンターを追加。

2000年度：Office 2000を導入。ハードディスクを増強し、台数を増やすための新規PCの試験運用開始。

<運営方針>

* 新学期開始とともにガイダンスで新2年生から情報室運営の有志を募る(以降この団体をPC-SUと呼ぶ。PCのスーパーユーザーの略である)。

* PC-SUには同部屋のPC・メール利用及び運営決定に関する優先権がある。メーリングリストで情報交換を行い、勉強会等を開く。

* PC-SUは学部2・3年生を対象とした講習会を開き参加者をサーバーに登録する。但し、他の学年でも希望があれば登録を行う。

* 同部屋の利用は登録済みの学生とし、飲食・喫煙・土足を厳禁とする。使用マナーの悪い学生は登録を抹消する。

* PCの機能は、各学科共通(授業も含む)で利用頻度の高いMicrosoft/Word,Excel、インターネット・メール、共有ディスク、白黒/カラー印刷を基本とする。その他のソフトや物品は必要性をPC-SUで検討し、共通性を優先して学部予算で整備する。

* 個人利用の他に、小グループでも利用できるスペースを確保する。

* 同部屋を授業で利用希望の教員は、前日までに内容を掲示するとともにPC-SUに連絡する。

* 同部屋でのトラブルはPC-SUまたは上野まで連絡する。特にプリンタの印刷問題を軽減するために、裏紙を使わず、Jobは少な目に、消去は各PCで行うよう心がける。

今までにPC-SU内では様々な論議が交わされた。“私語・飲食やゴミの放置まで誰が注意するのか、不法なインストールや故障をどのようにくい止めるか、誰がネットワーク等の知識を教えてくれるのか、そもそもPC-SUをやるメリットは何なのか、等々”。いずれも情報処理技術(IT)以前の問題である。情報演習室を的確に運営するために、例えば、専門のSE・実験助手を配備する、業者に委託する、学生アルバイトで対処する、などいくつかの方法が考えられる。いずれの方法にも頼らずあくまで有志(ボランティア)で進めたのはなぜであろうか。それは、諸処の問題を組織の中で解決していく能力こそ21世紀の社会に出ていく学生諸君に求められており、その根元は自主性とリーダーシップの育成だと考えるからである。

いろいろ書きつつもこの5年間連日にわたり情報室が利用され、昼夜を問わずシステムが安定稼働しているのはPC-SU諸君のおかげである。彼らに心から感謝を申し上げたい。特に、複数の学科学生をまとめるといふ大役をこなしてくれた高野・白石・谷本君、PCに疎い私を補助してくれた安田・平川・中川君、他名前をあげたらきりがなが、君たちの努力無くして現在の快適な情報室は実現しなかったであろう。2001年度にはいよいよPC本体のリプレイスも計画されており、新規代表の青柳君も含めたPC-SUと多くの学生諸君の積極的な情報室利用を期待している。最後になりましたが、計画学科の井手さん、国際教育センターの高橋さんおよび図書情報センターの方には、常に多くのアドバイスを頂きました。物品の整備には、予算委員長のご努力により、学部実験実習費を充てさせていただいております。

環境計画学科 環境社会計画専攻

土屋正春

参加型の地域環境計画とは何がコアの部分に位置しているのか、位置せねばならないのか。これにアプローチするために時間の大半を費やした。関係者の関わり方が極めて複雑なのが一般的なスタイルで、それだけに、計画策定のための市民会議などでの参加者の発言ひとつにしても、よく理解するためには何をどの角度から考えての発言なのかを整理せねばならず、手間は非常にかかるのが常である。しかし、自治体によっては2年目、3年目という時間をかけている場合もあり、そこそこに人間関係が築かれている場合の議論の建設的な様子は参考になることが多い。

改めて自分の暮らしている街を見直す、という作業から始めることが多いのだが、とりわけ男性は事情に疎いことが多く、女性は議論の組み立てに不得手な場合が多い。また、見知らぬ者同士が地域の将来を議論するという経験のない作業にチャレンジするというハンデがある。そうした基本的なマイナス面は時間をかけるより他に解決方法がない。これに加えて自治体側には、延々と住民が繰り広げる市役所批判に耐えねばならないという面がある。

現在の市民参加をめぐる動きには、行政と市民とが同じテーブルに着くこと自体が「参加」の目的であるかのような感があり、実際にそれだけの参加形態で地域計画が作られているとしか思えない事例もあるほどだ。これは明らかに思慮が足らず、両者が作業目標を強く共有することが必須なのだが、そうなっても議論の展開はスムーズという訳には行かない。「参加」は、課題山積の研究テーマではある。

秋山道雄

2000年は、世紀末にあたっていたせいか、「20世紀最後の」といったキャッチフレーズが飛びかうことの多い年だった。何のへんてつもない通常の行事が、20世紀最後のと銘打って行なわれるので、あたかもスーパーの特売場があちこちでできたかのような風景を目にすることも一再ならずあった。年があげると、今度は、21世紀初めというキャッチフレーズが、それにとって代わった。同じものが、違う衣をまとって出るといこともめずらしくない。この調子でいくと、今年度の講義は、12月末までが20世紀最後の講義であり、一月に入っで行なった講義は21世紀初めの講義ということになってしまう。「一代にして二世を経たるがごとし」のミニチュア版が、へたをするとパロディに転化しかねない時間の魔術だった。

今年は、例年になく非常勤の講義を5件（通年1、後期1、集中講義3）引き受けたため、夏期休暇や冬期休暇をあまりとることができず、年中働いているような感じの一年だった。各大学とも専任のスタッフには限りがあるので、提供科目を増やすためには、他大学のスタッフに依存せざるを得ないというのが、非常勤の講義を依頼する通常の原因であろう。これは、本学も例外ではない。今年度依頼を受けたなかには、それに加えて新しい傾向を伺わせるものがあった。たとえば、社会人向けの大学院を新設し、専任のスタッフがそちらの担当となったため、従来の大学院の講義を外部に依頼するというケースである。あるいはまた、学部・学科再編により新しいコースを新設（環境関連のもの）したが、それを担当するのに適当な専任のスタッフがいなかったため、外部に依頼するというケースもある。大学の再編が、非常勤の講義に

もさまざまな影響をもたらすことを身をもって感じた一年であった。

集中講義をして実感するのは、これが連続した講義なので、早く進むということである。それは、結果的に講義の量がはかどることでもある。通常は、週に一度の講義なので、講義の冒頭では前回のさわりを復習してから次に進んでいくが、集中講義ではその必要がない。したがって、講義前には通常の場合より多くの準備を必要とする。その意味で集中講義は負担が多くなることは確かだが、逆に、半期分をまとめて講義するとどこまで進むことができるかを知るバロメーターの役割を果たしてくれる。それに学生も、まとまった話を聞くことになるので、講義全体の印象をつかみ易いのではあるまいか。こうした集中講義の形式は、非常勤の場合に限定するのではなく、専任のスタッフが行なう通常の講義でも活用したら良いのではないかと、というのが一年を終えての感想となった。

奥野長晴

「フィールドワークIII、卒業研究と合わせて2年間大変お世話になりました。与えられた勉強しか知らなかった私が自ら学ぶ勉強の喜びを知ることができたのはフィールドワークIIIで奥野研究室に入ってからでした。そしてこの2年間とても充実した日々を過ごすことができました。卒業研究では、常に自分のことのように私の論文を気にかけてもらい本当にありがとうございました。実のところ、先生のそういった気持についていけない自分にはらだたしさを感じたこともありました。そんな先生の熱意は忘れることはできないと思います。

一年生のときは先生からテニスを教えてもらったこともありました。卒論の最中何度も連れていただいた食事、先生のご夫妻に招待いただいた雪の奥志賀高原ホテル...大学でこれほど教授に親しくしていただけたとは思っていませんでした。奥野先生を始め多くの先生方や友人達に囲まれ、私はこの4年間本当に幸せでした。わたしはこの大学にきたことを後悔したことはありませんし、むしろ逆に誇りに思っています。

これからもいろいろ壁にぶつかると思いますが、何にでもぶつかって行く覚悟です。そう思えるようになったのは奥野研究室で身についた自信からです。わたしにとって奥野先生は先生であり父親のようでもありました。先生から受けたご恩は忘れません。それを先生には直接お返しできませんが、それを後輩に引き継いで行こうと思っています。先生から教わった気功を使わせてもらっています。本当にありがとうございました。」

以上は卒論終了後、ゼミの学生が私にくれた手紙の一部である。大学勤務の経験皆無、手探りで始めた授業、試行錯誤による卒論の指導、それでも手塩にかけたとの自負はある。実際、学生のために使った時間は半端ではない。深夜まで彼らと演習室で過ごしたのはしょっちゅうのことであった。わたしのこの一年は学生にささげたこの一年でもある。だが、しかし、この手紙から、これは無駄な努力でないことがよくわかった。こちら側が本気で取り組めば、学生側はこれだけの影響を受けてくれるのだ。これを受け取って、私は教育の醍醐味と教育者の冥利を心行くまで味わっている。

末石富太郎

授業法改善の模索

定年までの最後の年にまだ授業法のことをいうのは、いざさか悪足掻きの感もあるが、私は1982年に「劇場大学論」（『千里眼』第1号）を書いて以来、常に試行錯誤を重ねてきた。この1年には、環境計画学、環境倫理学、合意形成技法などの担当を止めたが、99年度に環境意味論で成功した方法（授業への質問をミニレポートに書かせ、総合的な回答を翌週に返す）を、環境学原論にも適用した。ただし登録学生数が400に近く、翌週に回答というのは到底不可能で、冬季休暇中に集中して作業せざるをえなかった。

また奥野専攻主任の提案で、意味論と原論の両方の講義を毎回ビデオ録画をしてもらい、将来の電子授業への試みの第一歩とした。欲をいえば、この録画を15秒ごとに画像分析して自己点検をすべきなのだが、これは退職後の仕事にしたい。

原論ではもうひとつ、田尻宗昭の講演を授業で再現した時には、「実験授業」と称してBachの無伴奏組曲ノ演奏ヨーヨー・マ(院生の守谷光平の選曲)の音量操作をしながら流してみた。日大工学部で講義している友人と雑談中に、彼は既に実行していると聞いたからである。まだ完全集計をしていないが、学生による授業評価の一部としてこの効果を訊ねた結果は、5点満点で平均約3.5点、ただしやや二極分解していて、4~5点とした者は「授業に集中できた」「緊張が高まった」と答えたのに対して、2点(1点はなし)とした者は、「眠気を誘う」が主な理由であった。なお中間には「意味不明、不要では」と散見された。

年明けに外国出張中の柴田教授から、環境科学概論の一部として「景観・街路・建築」の代講を依頼され、意味論や原論と抵触せぬような内容で実施した。こういう機会を時々もつことは、自分の講義を別の角度で見直す効果があることを発見した。

講義以外の講演記録

年報第1号以来続けている講演記録の自己点検である。未了の分も含んでいるが、依頼件数が減ってきて、聴衆総数は延べ360人±であった。

年月日	演 題	主催・場所	対 象	経 緯*	反 応	自己評価
00.06.24	学ぶこと:環境・都市・大学・市民(淡海生涯力レッジ理論学習講座)	県生涯学習課・A2-201	一般市民約50人	学内調整分担	暗くすると寝る人	引き込んだ自信あり
07.01~02	市民研究にもとづく政策提言のために	千里リサイクルプラザ	吹田市民研究員各30人	所長としての自発	feasibilityへの無理解	実例による演習が必要
09.27	城塞を出でていざ平野へ(環境学コロキウム)	環境科学部BO会議室	教員・学生約70人	セミナー委依頼	学部再編の質問	radicalな話題提供の難しさ
11.10	Beginning LECS84 and Process Design toward Worldwide Lake Environmental Plan (9th LECS Pre-Conference)	ILEC,琵琶湖研究所	県下/外国大学生ら約30人	幹事学生依頼	日本学生の英語力確認できず	原稿なし最後の英語speech?
11.25	新世紀に遺すべき環境問題の表現デザイン - 水俣病を事例として(卒業生嶋本貴美子と連名)	19thJASESS 奈良女子大	学会員約30人	応募・審査パス	質疑数件	最後の学会発表?
12.14	水資源と汚染問題 - capacity buildingとleadership	慶応義塾SFC研究所leader養成講座JICA研修会	選抜者15人	前回好評による依頼	特になし	内容過多で時間不足
01.01.31	未成品の引出しの中から(定年退職最終講義)	環境科学部A2-201	100人程度を予定	義務的行事	予定につき不明	45年の反省で感無量
02.02	脱石油政策の可能性 - 脱建築からエネルギー問題へ	日本文明研究所	10人の予定	上田篤の依頼	予定につき不明	華麗な転進課題に感謝

*) 出講を要請された主な理由

石川 義 紀

あいかわらず慌ただしい一年であった。昨年と何が変わったのかあまりよくわからない。学生が入れ替わっただけではなかったのか。そのような中で変わったことといえば、市民団体の立ち上げに関わったことぐらいか。某国家試験の試験委員もやったが、これらで一年が終わったという感じ。公害紛争調停のほうは2月に決着したのであまり負担にならなくてよかった。

市民団体の立ち上げや運営というのはえらく手間のかかるもので、事務局機能がよほどしっかりしていないとまともな活動はほとんどできない。かかわった市民団体は某市役所が音頭をとったものなので、当分の間は市役所

が事務局機能を果たしてくれているからいいものの、いずれ市役所からは離れることになる。どうなることか。

かかわったのはよかったのだが、彦根という地理の悪さには困った。市民団体の世話というのは地理的に近いところにはないと、情報の伝達はともかく、顔を合わせての打ち合わせや相談となると、全く不便である。大学からバス・電車と乗り継いで、2時間近くかけて打ち合わせに向かう。ボランティア活動だから仕方ないが、時間も交通費もかなりのものになる。やはり地元にはないと困ることが多い。大規模な団体の場合には、専任の事務局も置けるだろうし、小人数の同好会的な運営ならよいが、中途半端な規模の団体は本当にやりにくいだろうと思う。

市民団体というのは全くの自由意志参加だから、いろんな人が集まってくる。これらの人たちの意見を集約するのは全くむずかしい。合意を形成しなければならないという意識がない会員に、合意を強制することになる。良い方法はないものか。

井 手 慎 司

平成12年、わたしにとつてのこの年は、世界湖沼会議(平成13年11月に滋賀県で開催)の準備にはじまり、準備におわたった一年だった。昨年から準備にかかっていた、湖沼会議のための市民団体「湖沼会議市民ネット」をやっと5月に立ちあげることができ、6月には近江八幡市で湿地にかんするシンポジウムを開催、シンポの翌日から22日まで、ドイツ・ハノーバー博にあわせて開催されたりビングレイクス会議に20名ほどのツアーのコーディネーターとして参加。シンポジウムの数日前には、諫早のご自宅に、亡くなられるまえの山下弘文さんを訪ねた。8月には「We Love びわ湖」に出演。9月、念願のプリウスを購入。今年はまだ近江八幡市の環境基本条例の審議会と山東町の環境基本計画策定に参加。夏にはボパール研修のコースリーダーを、11月には途上国NGO水質研修のコースリーダーを務める。11月には湖沼会議のプレ会議としての第5回リビングレイクス国際会議を県下で、12月には琵琶湖博物館で湖沼会議のプレNGOワークショップを開催。さすがに11月から12月にかけてはへとへとになりながらだったが、なんとか成功裡におわらせることができた。

近 藤 隆 二 郎

環境社会計画専攻に来て2年目だが、一番驚いたのは、その卒論(着手 中間 完成)発表会である。社会計画専攻には、それぞれ専門が異なる教員ばかりが集まっているが、卒論生に対しては遠慮無しに突っ込むのである。例えどの先生のゼミ生だろうとも関係ない。専門が異なるわけだから、当然、「それはどのような意味か」と基本的要素の確認から始まり、「なぜそのような手法を使うのか」といった質問や指摘が浴びせられる。指導教員も突っ込む教員も専門が異なるゆえに、そこには共通の専門空間は無く、あるのは取りあげられた環境問題と学生だけとなる。つまり、その手法を使うことが当たり前といった専門性に逃げ込むことが許されないのである。この厳しい突っ込みは、ゼミ生を学会に連れて行ったときに「学会ってあんなにやさしいものなのですねえ」という言葉にも相対的にあらわれていると思われる(逆に学会が馴れ合いということか)。

この場合は非常に新鮮かつ多種多様な切り口に刺激を受ける場でもあり、おそらく、環境社会計画専攻を理解するには、この場を御覧になることもひとつの方法ではとったりもする。答える学生も大変だが、突っ込む教員側も大変である。全く専門が違う発表にも突っ込まなければならず、また、教員間のものさしが異なる場合は、専攻会議で夜遅くまで議論が続くこともある。とはいえ、個人的には、この遠慮無しの突っ込みは続いていって欲しい大切な仕組みであると思っている。

私自身といえば、講義演習が増えるとともに、徐々に滋賀県周辺のプロジェクトにかかわる機会も増えてきた。とくに、京都市や大津市などの環境基本計画およびアジェンダ関係への取り組みでは、熱心な市民やNPOの活動に刺激を受けた。また、「歴史街道」のプロジェクトで、高野町と西熊野街道周辺においてワークショップ企画からファシリテーションまでを実施した。こういった仕事？が増えていきそうな気配。

巡礼という民俗の解釈とその再構築という、自分のライフワークにも近い「四国いやしのみちづくり」にもかかわったが、構想と実践との間の混乱の中に埋もれている状態。来年どうなるか不安。インドのAurovilleに調査に行かなければならないのだが、全く時間がとれない。身代わりではないが、院生がインドのベナレスの調査へ行った。夏には2度目のインカ遺跡調査へ。水路遺跡の勾配を水源からひたすら測量する調査であやうく崖から落ちそうに。これは「垂直のコスモロジー」としてまとめることができそう。インカの温泉は大変気持ちよかった。『NHKスペシャル四大文明 - 第3巻インダス文明』に一部執筆したが、“売れる本”というものを初めて経験。

学会論文は単著、共著で6本ほど書いたが、やや乱暴になって少々自戒。が、『環境システム研究』における環境理念・環境論の多様性と展望」は面白く書けたと思う。また、昨年度ゼミ生卒論をベースとした穀物菜食者の環境意識に関する論文は、「人々の環境に対する意識が、穀物菜食となって具現化している団体に着目し、意識と実践との間を探る研究として興味深い。」と評された。院生2人と新ゼミ生6人が所属し、研究室運営やゼミでの議論に幅が広がり面白い。

滋賀県の火祭りに興味がある。琵琶湖と火祭りとの関連は何だろう。熊野の奥駆けに参加し、四つん這いで尾根筋をまっすぐのぼった。身体と自然との境界のゆらぎを体験。

心に刺さった言葉...「そしてチツソとは何なんだ、私が闘っている相手は何なんだということがわからなくなって、狂って狂って考えていった先に気付いたのが、巨大な『システム社会』でした」¹⁾。「(社会)システム」を多用する自己への問いかけに。システム化の限界を意識。

1) 緒方正人「魂のゆくえ」,栗原彬編『証言水俣病』岩波書店 2000年2月 p194

金谷 健

教育関係

カリキュラム改訂に伴い、応用統計学（旧環境統計学）が学部必修 > 学科必修 > 専攻必修（今年度から）となった。そのため、パソコン使用（エクセル多変量解析）による演習形式の授業が可能となった。内容も大幅に変更し、多変量解析を中心とした授業とした。具体的には、多変量解析として判別分析・主成分分析・因子分析・クラスター分析（重回帰分析は応用統計学で）、プラス独立性の検定と品質管理である。1年目なので準備が大変であったが、学生達が卒論等に取り組む際に「そういえば、こんな手法があったな。詳しいことはわからないが、ともかくパソコンでデータ解析してみよう。」と考える程度には理解されたのでは、と期待している。卒論は6名、修論は1名。本稿執筆時点で、卒論は6名無事提出、修論は最後の追い込み。果たして7名無事卒業できるかな？

研究関係

下記2件を発表した。

- 1) 供田陽介、金谷健：環境報告書の評価手法の比較に関する研究 大手建設業の環境報告書を事例として、土木学会第28回環境システム研究論文発表会講演集、271-279、2000年10月
 - 2) 金谷健、溝口真太郎、黒河肇：需給バランスからみた都市ごみ溶融スラグの道路路盤材へのリサイクル可能性、第11回廃棄物学会研究発表会講演論文集、229-231、2000年11月
- ともかく忙しい1年でした。

環境計画学科 環境・建築デザイン専攻

内井 昭 蔵

教育

時間が過ぎるのはなんと早いことか。毎日毎日が秒刻みのスケジュールの中、どれ程の教育効果や業績をあげることができたか心許ない。しかし走り続けることしか方法はない。大学院修士学生論文指導についてはかなり自主性を重んじた結果、ユニークな論文が予想される。テーマは「ニッチの研究」「集落的庁舎のあり方」「十一面観音の癒しの空間」といったものだが、それぞれ「個」を中心とした環境設計といった共通のテーマを秘めている。大学の卒業論文も「土壁」「鴨川納涼床」「記憶と環境」「伏見の景観」「鎮守の森」といったものがまとめられ、現在これに関連したディプロマ作成中である。FW は昨年に引き続き八坂計画を進め、100分の1の大きな模型を制作、注目された。

研究

「土、水、大気」といった生態系を維持する要素を如何に建築・都市に結びつけるかというテーマで研究を継続した。その成果は北九州で開かれたまちづくりシンポジウムにてパネル展示をした。学会論文では「集合形態設計での建築デザイン調整方法の研究 建築物の統合方法の分析・MA方式研究その16」マスターアーキテクト方式による建築集合体の設計方法の展開で北尾靖雅との共著が採用された。

学会・その他論文

日本建築学会大会（東北）の教育と資格制度小委員会のシンポジウムにて「倫理教育」に関してレポート、又、学会誌1月号に「建築教育における倫理教育」論文、IDE：現代の高等教育12月号大学の20世紀にて「キャンパスの100年」を発表した。

設計実績

戸隠ガールスカウトセンター、北橋村役場庁舎、犬山健康福祉センター、衆議院議長公邸きた幼稚園などの設計を監修し完成させた。

賞

大分市美術館（BCS賞、大分市建築大賞）、七尾市山寺のみち（石川県景観賞）、京都市文化功労賞表彰。講演会・など
奈良景観シンポジウム「古都と景観」、建築士事務所協会パネルディスカッション「新世紀の建築と環境」、まちづくり連続シンポジウム記念講演「ランドスケープデザインと生態系」、大分市建築大賞記念講演会「美術館の設計」など他にも多くの講演をした。

出版

INAX「モダニズム建築の軌跡」単行本、INAX REPORTインタビュー：岡田新一・宮本忠長・阪田誠造・今里隆、近代建築責任編集「イマジネイティブな教育空間の創造」、京都新聞連載エッセイなど多数。

この他公職として「京都市公共建築設計指針研究会」委員長、「鴨川の橋を考える会」の会長、BELCA賞ロングライフ部門審査会 主査を歴任。

奥貫 隆

1 調査

平成12年8月、在外研究の機会を得てイタリア諸都市の都市景観保全に関するフィールド調査を実施した。イタリアでは、1985年ガラッソ法に基づく広域景観計画が州政府によって実施されている。「計画なくして開発なし」という規制力の強い地域計画である。既に全20州のうちカラブリア州を除く全ての州で計画が策定されている。こうした広域景観計画が市民に支持される背景には、中世以降の歴史環境遺産に対する市民の意志を行政施策に反映してきたからに他ならない。今日私たちが目する田園景観と都市景観の美しい調和が、決して一朝一夕のものでないことに気づかされる。ウンブリア州を代表する丘陵都市アッシジでは、歴史都市地区、田園地区、自然公園地区などを適切に定めており、単に、歴史的建築物群を保全するにとどまらずそれらの遠望景観を地域固有の風景として計画的に保全している。

これまで調査してきたロンドンのSt. Paul's Heightに基づくStrategic View（ランドマーク眺望保全）やパリのPOSに基づくFseaux de Protection（都市眺望景観規制）に加えて、広域景観を対象とするガラッソ法の成果に景観計画の可能性をみるとともに、滋賀県においても琵琶湖岸に位置する歴史ある都市が近代建築に埋め尽くされる前に、こうした景観コントロール手法の導入が図れないものか今後のフィールドワーク課題としたい。

2 教育

21世紀を迎えた年に県立大学大学院修士課程の第1回卒業生を送り出す。初めて指導する修士研究について、教員の指導可能領域との調整に苦心すると覚悟して臨んだが、結果的には、テーマ決定、文献収集、フィールド調査、GISデータ作成など一連のプロセスを順調に踏むことができた。修士学生の資質にも恵まれ、指導する側される側が一体となった共同研究的イメージで研究指導を行った。研究対象地の景観を画像データ化するに当たり画角140度の特殊パノラマカメラを購入したのも院生からの相談がきっかけであった。GISソフトによる土地利用動向経年変化の図化については、航空測量コンサルタントに指導を仰いだ。1年半に及び調査研究の成果は、2枚の緑地保全分級図に集約されるが、そこに至るまでに投入したエネルギーは、計り知れないものがある。改めて、学生の若さと根気強さに敬意を表したい。

今回の研究は、都市及び都市近郊の緑地保全をテーマとするものであった。一方、就職先が開発ディベロッパーであるというのも偶然の取り合わせで、おそらく彼がこれから実務を担当していく上で、開発と保全の狭間で悩む場面があるであろう。しかし、環境を扱うと言うことは常に二律背反との相克であり、そのプロセスでなにを考え、どう決断するかが問われる。その時に求められる一つの規範がこの研究を通して彼の中に構築されたと信じたい。

3 活動等

プロジェクト：所沢元町市街地再開発ランドスケープ基本設計、刈谷市旧依佐美送信所周辺土地利用構想策定、平塚市地区公園基本構想策定、河川環境展2000出展ブース企画設計（幕張メッセ）、彦根城内街路照明基本計画策定

委員会等：滋賀県景観審議会会長、滋賀県風致保全審査会会長、滋賀県公害審査会委員、建設省近畿地方建設局自然環境アドバイザー、大津市総合計画審議会委員・環境都市基盤小委員会委員長、彦根市景観アドバイザー、長浜市建築審査会会長、野州町環境基本計画策定専門委員会委員長

石田 潤一郎

新聞に寄稿する機会が多かったので、名前と、ついでに顔も人の目にとまって、よく仕事しているような印象で見られもしますが、実はまとまった成果は少ない。よくいえば助走期間でした。

昨年の年報でも触れた『滋賀県の近代化遺産』（3月）『近代日本の郊外住宅地』（3月）『長浜市史第4巻』（4月）が共著で出ました。2000年になってからの仕事では「残る建築・なくなる建築」（『公共建築第166号』）「聴竹居で成し遂げられたこと」（『アプローチ』2000年冬号）「近代空間の発見 大阪朝日ビル」（『まちなみ』第282号）『科学』と『趣味』のはざまで」（『聴竹居』実測図集』（彰国社））といったところです。

建築学会近畿支部近代建築部会の主査をおおせつかったので、心齋橋のそごう百貨店の保存要望書を渡しにいてテレビに映りました。大阪証券取引所の保存開発のための研究会委員もやって保存問題に頭を痛めることが多くなりました。

2001年に為すべきことは多く、単行本2冊、叢書での論文割り当てと、あたかも孫悟空の頭のワッカのように宿題があります。なお、4月に建築史学会賞をもらいました。1996年の『関西の近代建築』と1999年の『関西の建築』という、県立大に来てからの仕事を受賞対象になったのはうれしいことです。

三谷 徹

社会的活動

ハーバード大学デザイン大学院にて、国際シンポジウム「ランドスケープアーキテクチャの百周年」参加。パネルディスカッションにて発表。またランドスケープデザイナーの作品を集めた展覧会に「風の丘」を出展。このシンポジウム後数カ月の内に、大御所ヒデオ・ササキがこの世を去った。時代の変遷を感じる。イアン・マクハーク氏への日本賞授賞式および学術懇談会に出席。また後席にて天皇皇后両陛下とランドスケープに関するお話をさせていただいた。造園学会2000年全国大会分科会「ポスト近代のランドスケープ」にて「脱工業化時代における風景設計者の視座」をパネラーとして発表。建築学会2000年全国大会分科会「建築意匠から環境を考える」にて「ランドスケープアーキテクトからみたランドスケープ/建築家からみたランドスケープ」をパネラーとして発表。

設計活動

「府中市美術館」が竣工。ランドスケープデザイン2000年22号誌に発表。

「鴻巣市文化会館クレア鴻巣」が竣工。

（仮称）汐留C街区ネストグローブ実施設計完了。

（仮称）松下電工ショールーム実施設計完了。

（仮称）下丸子集合住宅基本設計完了。

（仮称）梅田U2プロジェクト基本設計完了。

その他執筆等

「ランドスケープ・アーキテクチャの100周年」

GA Japan 45号。

「21世紀に必要な環境デザインとは何か」

日経アーキテクチャ 2000-12-25号

「建築をめぐる対話2001 建築/ランドスケープ」新建築2001 1月号など。

杉元葉子

パリ

長期在外研修の機会を得て、10月半ばから1月末までパリに滞在し、ここを本拠地にヨーロッパ各地で現代建築を訪ね歩いた。

訪問した都市は、魅力的であればあるほど、そこに幾重にも重層した都市の価値が読み取れた。長い時の中で都市の骨格を支えつづける空間構造、都市の記憶をとどめおく表層＝ファサード、一方で生き活きと一瞬一瞬に現象する様相。昼夜で反転する空間の位相。陽光と闇。相矛盾する価値がそれぞれ明確な意思に支えられ共存し、冬のヨーロッパの都市空間に深さを与えていたように私には読めた。

訪ねた現代建築は、この都市の深さの構築を目指す明晰な意思を持つものと持たぬものに大別された。明晰な意思を持たぬものは形態が斬新であるほどに狂気の独白としてかよわく見えた。様々な相で都市文脈に反応しつつ明晰な意思の中で醸成された形態は、都市の時間軸の上に確実な位置を獲得しているように見えた。

一元的な理解は都市空間の深さを捉えきれない。私達が今持っている都市理解の手立ては、評価軸も、その構造化も不十分であるように思えた。現代建築の有効性を評価するために、何よりもイメージーションを持って都市の未来を思い描くために、この重層する都市の価値構造を読み解く枠組みが欲しい。

都市の未来への信頼に足る意思こそが、今最も必要なのではないだろうか。

部屋を借りてはじめて住んでみたパリは、近代都市とは思えないような人間くささと前衛の発想が共存する、歩いて歩いても魅力の尽きない都市であった。例えばパリを読み解きたいと思う。課題が見えはじめてるように今思っている。

迫田正美

昨年からスタートした琵琶湖周辺の集落調査は、南湖東岸の志那、矢橋、山田（草津市）に続いて、木浜（守山市）、北湖東岸の尾上（湖北町）まで調査範囲を広げた。主に戦後の集落形態の変化については、追跡の目途がついてきたが、各集落が本来持っていた空間構造を明らかにするためには、各集落の成立の起源にまで遡っていくことの必要性を実感した。次年度は過去の集落境域の変遷などを歴史資料を基に確認していく作業に力点を置きたいと考えている。

轟 慎一

* 赤野井湾集水域の景観構造と環境形成、滋賀県琵琶湖研究所所報第17号（1998年度）

* 琵琶湖湖岸地域の集落空間における生活環境構造の研究～滋賀県草津市志那を事例として～、平成11年度琵琶湖研究所委託研究報告書「琵琶湖湖辺域の土地利用に関する研究」

* 琵琶湖湖岸域の集落空間における生活景 滋賀県草津市志那の事例、2000年度日本建築学会（東北）都市計画部門・農村計画部門研究協議会資料「まちづくりのシナリオ・メイキング 「生活景」からの地域環境づくり」

* 滋賀県ふるさと・水と土保全対策委員

* 淡海ネットワークセンターNPO活動アドバイザー

* 彦根市環境審議会専門委員（環境基本計画策定部会）

* 政策分析手法研究会「南湖東岸域の集落空間における生活環境構造」（報告）

* 彦根市環境学習会「まちづくりと環境」（講義）

* 高槻市エコスタッフ会議コーディネーター

林 昭男

本年の活動を国外と国内とに分けて整理してみると次のようになった。

国外

環境負荷の少ない建築のガイドラインとその事例の視察のためニューヨーク市へ。都市計画局のHillary Brown女史の案内をうける。（1月）

アークピース・インターナショナル（平和・環境・人権をまもる建築家の国際組織）のExecutive Committeeがストックホルムで開かれる。（6月）私は1987年以来この組織の日本側窓口となっている。

舞踊家・ケイ・タケイのニューヨーク公演の舞台構成のためニューヨークへ。Theatre La Ma Ma（6月）

建築家・E.トゥリオ訪問（アマースト・Mass）（6月）

慶州近郊での中高年層を対象としたエコロジカルなコミュニティをつくるための打合せに韓国へ。（12月）

国内

地球環境・建築憲章の草案をつくるための起草委員会に参加（3月 12月）

日本建築家協会・第1回環境建築賞の審査で各地を廻わる（3月 10月）

新旭町および米原町の「地域新エネルギービジョン」策定委員会（8月 12月）

エコ村・ネットワークの設立準備およびその運営（6月 12月）

インター・ユニバーシティ・プロジェクト「木匠塾」に参加（8月）

日本建築学会大会・シンポジウム・パネリスト・地球環境配慮は設計をどう変えていくのか？（9月）

改めて、一年間の活動を整理してみると、大学外の活動が多かった。学内では、2回生の設計演習2課題（幼稚園・住宅）を設計プロセスの展開方法とパッシブ建築の考え方を重点的かつ個別的に指導するよう努めた。地球環境・建築憲章が制定されたいま、大学教育にどう反映させてゆくかが重要な課題だと受止めている。

藤原 悌三

平成12年度発表論文 森井雄史・藤原悌三・福本和正（2000.7）：滋賀県における表層地盤特性と彦根市の地震被害予測、元木輝美・福本・藤原・伊藤雅智：滋賀県内の学校校舎の耐震診断結果に対する若干の考察、福本・藤原・小林正実：在来構法藁葺き木造住宅の水平強度と動的特性、以上日本建築学会近畿支部研究報告集 藤原編著（2000.4）：琵琶湖周辺の集落形成履歴の調査と環境適合都市・社会システムの形成に関する研究、滋賀県立大学研究機関連携事業研究成果報告書 松波孝治・藤原・福本・森井・岡本祐果（2000.11）：3次元地震アレー観測記録を用いた彦根市域の基盤深度とサイト特性、第19回日本自然災害学会講演概要集 小林・藤原・福本・伊藤・森井・中野要・岡本（2001.3）：鳥取県西部地震調査報告その1、その2、日本建築学会中国支部研究報告 藤原（2001.4）：防災ハンドブック

(共著) 朝倉書店

Fujiwara, T., Fukumoto, K., Matsunami, K., Kobayashi, M. and Morii, T. (2000.5): Seismic Hazard Estimation in Shiga Prefecture, Japan他2編Symposium Hazard 2000, Tokushima, Japan

Fujiwara, T., Morii, T. and Fukumoto, K. (2001): Estimation of Seismic Hazard in Hikone by Using Observation Network in Shiga Prefecture, Japan, Journal of Natural Disaster Science (to be appear)

対外活動 日本建築センター超高層建築物構造審査委員会委員 日本建築総合試験所超高層建築物構造性能評価委員会委員長 滋賀県建築審査委員会委員 滋賀県建築物耐震判定委員会委員長 滋賀県左官工業組合理事 滋賀県建築士事務所協会理事 京都市防災会議専門委員

柴田 いづみ

A C T 【Action Connect with Town】 - 活動はまちにつながる -

5月から6月にかけて、ACT Stationの改装を行いました。建築の2回生が中心となり、完成後はイベント[Lady Killer]として、19日間に800人を越す来場者の記録となりました。最近の彦根の銀座街においては、記録的な数字になったと思います。ただし、改装完了も間近になって、ACTとして使用させていただいていたビルが売却され、立ち退きを6月中と引き渡されてしまいました。ビルの使用料は、彦根市と銀座街が半々で支払って下さっていたのですが、補助金は打ち切られてしまいました。ところが、新しいオーナーの好意で、11月から次ぎに転売される時点までは、継続してお借りできることになりました。

2000年の12月に「銀座光路、時～移ろい行く街～街をもう1度見つめなおす～」というイベントを行いました。空店舗や協力店舗に幕をたらし、ライトアップし、昔の写真をアーケードに展示しました。2001年3月には、「銀座光路 - 銀座画廊」で、地元の芸術家さん達の作品を銀座街の空店舗や協力店舗に展示します。

これら、一連のACTの活動は「地域研究交流Vol.15 No.4」「新建築2000年4月号」「LAND SCAPE DESIGN No.21 2000」「city & Life no.58 winter 2000」に原稿を書きました。他に「月刊廃棄物、暮らしとごみとリサイクル-商店街をリサイクルする」他、多くの新聞記事に取り上げていただきました。視察もふえ、ACTをテーマの講演依頼も増えている中で、経済産業省の、コミュニティビジネスに関する全国20カ所程度のモデル事例の一つに選ばれました。テーマは、「コミュニティビジネスと中心市街地活性化-若者の街づくり参画」だそうです。

目白まちづくり倶楽部

東京・目白の地元で、目白駅（設計は我々ではありません）の改修を契機に集まったメンバーで、完成イベントを地元の手づくりで仕立てました。その時のプロデュース・司会などのワーキング・グループが、目白まちづくり倶楽部です。このイベントから、さらに、駅前広場を行政に提案し、その案が学習院側の駅前広場として実現しつつあります。これは、経済産業省、農水省、環境省、厚生労働省、文部科学省の発行する「国土交通Weekly Vol.15」にて、取材記事にいただきました。

展覧会・木漏れ日のある街

2000年10月5日から2001年1月9日まで、東京世田谷区のフクラシヨールームで「パストラル・コートとまちの修景」の展覧会を行いました。東京・目白の集合住宅とまちとの関わりをテーマにしています。

海外研修

11月から1月まで、2カ月半、ヨーロッパにて研修をまいりました。大半はパリの国立図書館においての「イタリアの庭園のフランスにおける影響」の資料収集でした。今までも何年にもわたって、地道

に進めている作業ですが、今回は冬ということもあり、イタリア庭園の現地調査は無しで資料の発見に重点をおき、イタリア側、フランス側の研究者の方々から貴重な情報をいただきました。

高宮駅

彦根市の近江鉄道高宮駅とコミュニティ・ホールの実施設設計をしています。赴任して5年が過ぎますが、初めての滋賀県における設計なので、地域の方々に愛される施設に仕上げたいと思っています。駅はまちの顔なので、前面の広場も含めて構成を考えています。

水原 渉

【主な論文発表、その他】

ドイツの住環境整備の取組みと今後の方向、『2000年度日本建築学会大会（東北）都市計画部門研究資料』、2000年9月収録、47～60頁

ドイツの空間計画における住民チェック、『前衛』2000年11月号、26～35頁

【その他の主な研究・教育関連活動】

海外調査：7月末から8月にかけて短期の渡欧を行った。ドイツではアーヘン工科大学Curdes教授を訪問、都市計画の外部地域（Aussengebiet）の状況を調査、Aachen、Koeln市の市役所、NRW州のケルン広域行政区官庁を訪問し、地域計画について議論、資料収集を行った。英国ではReading市などを訪問し、開発許可などの調査を行った。

本年度は学部新カリキュラムが2回生まで進行し、「空間計画論」（後期）の講義を初めて行った。内容は、空間論、計画論、空間計画論という様な構想で進めていったが、準備が偏っていたため、途中から自転車操業も甚だしく、困苦した面があった。早く安定させたい。

「地域の資源・技術を生かした住まいづくり・まちづくり」研究会の立上げと活動に参加した。

【主な学内活動】

大学院教務委員、学部3回生担任、その他。

【主な社会的活動】

滋賀県開発審査会委員、 滋賀県住宅政策懇話会委員、 滋賀県屋外広告審議会委員長、 彦根市建築審査会会長、 「新しい淡海の住まい・まちづくり」検討委員会委員長、 滋賀県建築士審査会会長、 日本建築学会 / 都市計画委員会 / 地域計画小委員会主査、 滋賀自治体問題研究所理事長

【その他】

10月14日に谷口典宏君が交通事故で亡くなった。その前日にFW で話をしたばかりで、人の命のはかなさを改めて感じさせられた。ご両親が最も気の毒だ。改めて御冥福をお祈りします。

福本 和正

この1年は、やっと4年制大学らしくなり、ゼミ生の卒業研究を日本建築学会に投稿できるようになった。共著ではあるが近畿支部に3報、全国大会に4報投稿することができた。

併行して進めている研究に関連した思いがけない出費と、特別研究費の3年継続後の中休み（このような規定があるのか否かは不明？）のため、一般研究費からの立替が必要となった上に、10月6日の「鳥取県西部地震」に伴う初動調査の第1次（2泊3日）、2次（1泊2日）で、多額の費用が突発的に必要と

なって40万円の赤字になり、専攻内の先生から借りる結末になった。

社会的活動として、滋賀県建築事務所協会を事務局とする「滋賀県建築物耐震判定委員会」(副委員長)では、平成9年度秋に発足以来、現在までに約160棟の学校校舎の耐震判定をしてきた。建築基準法の改正により、建築確認等を扱う「(財)滋賀県建築住宅センター」が平成12年度より発足し、年2回開催される理事会にも出席している。

< 発表論文 >

- 1) 福本・藤原・小林：滋賀県内湖東地域の軟弱堆積層での地震波の増幅とその層構成の推定、滋賀県立大学学術振興助成金研究成果報告書、平成12年4月。
- 2) 藤原・福本・小林：滋賀県における表層地盤特性と彦根市の地震被害予測、滋賀県立大学学術振興助成金研究成果報告書、平成12年4月。
- 3) 福本・藤原・小林：在来構法藁葺き木造住宅の水平強度と動的特性、日本建築学会近畿支部研究報告集、2000年6月。
- 4) 元木・藤原・福本・小林：滋賀県内の学校校舎の耐震診断結果に対する若干の考察、日本建築学会近畿支部研究報告集、2000年6月。
- 5) 森井・藤原・福本・小林：滋賀県における表層地盤特性と彦根市の地盤被害予測、日本建築学会近畿支部研究報告集、2000年6月。
- 6) 福本・藤原・小林：在来構法藁葺き木造住宅の静加力実験による耐力と水平力分担率、日本建築学会2000年度大会(東北)学術講演梗概集C1構造III、2000年9月。
- 7) 福本・藤原・小林・近野：在来構法藁葺き木造住宅の微動測定による動特性評価、日本建築学会2000年度大会(東北)学術講演梗概集C1構造III、2000年9月。
- 8) 伊藤・元木・藤原・福本・小林：滋賀県におけるRC造学校建築物の耐震性能に関する研究、日本建築学会2000年度大会(東北)学術講演梗概集C2構造IV、2000年9月。
- 9) 森井・藤原・福本・小林：観測データに基づく彦根市の地震被害予測、日本建築学会2000年度大会(東北)学術講演梗概集B2構造II、2000年9月。
- 10) 松波・藤原・福本・森井・岡本：3次元地震アレー観測記録を用いた彦根市域の基盤深度とサイト特性、第19回日本自然災害学会学術講演会、2000年11月。

松岡 拓公雄

今年の授業、設計演習課題以外の活動記録として。学外活動としては通年でJIA建築家資格制度実務訓練委員会委員、一級建築士試験問題作成委員。講演会などは日本建築家協会にて空間講座の講演会、日本建築学会建築週間講演会「負の遺産」。京都造形芸術大学ゲストクリニック、福岡大学ゲストクリニック、滋賀県建築士指定講習会講師。INAXより出版された特集を「先進性と永遠性」名づけ責任編集、巻頭文を執筆。研究室に全学年を通した縦ゼミを実験的に構成、ちーむはっけいと名づけ、全13大学セッションに参加、関連で神奈川や長野の集合住宅を研修視察、「社会資本としての集合住宅」をテーマに開出今、上多良など集落のデザインサーベイを行う。個人では島建築文化研究の下調査で南大東島へ2度視察。四万十川へ水系視察。フランスやスイスへコルビジエの足跡を追って東京芸術大学の藤木教授や県立大学の石田助教授と研修旅行、実践面として研究対象として関わってきた国立集合住宅竣工(東京国立市)。道玄坂プロジェクト起工(東京渋谷区)、ジョイス広尾竣工(東京港区)、鳥取環境大学教員宿舎起工(鳥取米子市)、救世新教光明殿神座竣工(三重県津市)、美竹町集合住宅起工(東京渋谷区)、東急本社陸橋

(東京渋谷区)、南大東島ビジターセンター竣工(沖縄県南大東島)等。群馬中里村庁舎コンペに院生と参加(落選)、受賞として建築学会作品選奨2000(ソニー・ミュージック・エンターテインメント)、第15回日本建築士会連合賞最優秀賞、2000年グッドデザイン賞、日本建築業界賞(BCS賞)、第10回日本建築美術工芸協会特別賞(鳥取県立フラワーパーク)など受賞が多く、大学へ就任するまでの実践活動が評価されたと考えている。その他研究室にて院生と中間領域を研究テーマに住宅設計を2題(熊本は竣工・福岡は工事中)実践。

小林 正実

[研究発表] 1) 上谷宏二、樋口公平、小林正実：歪硬化を考慮した3次元連続体に対する対称限界理論、日本建築学会大会学術講演梗概集(東北)、構造B1,pp.295-296,2000. 2) 福本和正, 藤原悌三, 小林正実：在来構法藁葺き木造住宅の静的水平加力実験から求めた水平耐力と壁・柱の分担率、日本建築学会大会学術講演梗概集(東北)構造C1,pp.135-136,2000. 3) 福本和正, 小林正実, 藤原悌三, 近野友之：在来構法藁葺き木造住宅の微動測定による動特性評価, 日本建築学会大会学術講演梗概集(東北)構造C1,pp.209-210,2000.

[各種委員] 1) 日本建築学会、連続体の不均質・多相問題小委員会委員 2) 日本建築学会、鳥取県西部地震木造被害調査WG

生物資源管理学科

久馬 一剛

この一年は、私にとって県立大学における最後の一年であった。京都大学に奉職した34年間と比べると、県立大学での6年間は決して長いとはいえないが、大学の創設から順を追って、学部と大学院の整備の諸階段を身近に見ることができたという点では、得難い経験をさせてもらったと考えており、このことを可能にして下さった多くの方々へ感謝の意を表するものである。

昨年夏から、鋭意完成を目指して努力してきた「熱帯土壌学」の原稿執筆と編集をようやく終えることができた。40年に及ぶ研究生生活の主要な部分を、熱帯の土壌と関わってきたものとして、この本の上梓は自分自身の存在証明の意味をもっている。残念ながら退職の時期にあわせて出版することはできなかったが、2001年中には世に出せると思っている。

もう一つ、一昨年から取り組んできた「熱帯農業事典」も、すでに原稿を出版社に渡し、出版をまつばかりとなっている。編集委員長として、多くの分野の専門家にご協力をいただきながら進めてきた事業であるが、この事典の出版はわが国における熱帯農業研究の一つの到達点を示すとともに、新しい飛躍への足がかりともなるものであり、私にとって大きい喜びである。

これらの熱帯研究だけでなく、来年三月の退職を機に、本学での講義をもととして「土壌環境学」を出したいとも考えたが、成書とするにはまだまだ内容の充実を図る必要があって、残念ながらものにならなかった。この課題を後任の川地武教授に引き継いでいきたいと考えている。

この一年もそうであったが、この6年の県立大学での全期間にわたり学内外の多くの方々にお力添えをいただいた。改めてお礼を申し上げたい。

中嶋 隆

今年度もニワトリで始まり、ニワトリで終わった。自分の研究、卒業研究、学生実験のために鶏卵、血液、糞の採取、そして解剖に1年間を通じてニワトリには大変お世話になった。

鶏卵については、卵殻質の向上、卵黄中コレステロールの低減化、消費者が好む卵黄色とは、などについて調査した。血液については、血漿中コレステロールおよびカルシウム含量、糞については窒素含量の低減と臭気について調べた。

今年度から新しい科目「家畜家禽繁殖学」を講義した。準備に結構時間を費やした。なかでも、動物のバイオテクノロジーでは、「遺伝子操作」による動物の改造については考えさせられた。動物を完全に人間の意のままに操り、所有物にしてしまっている。動物はそれぞれ目的をもち生きているのであって、人間の技術で別の方向に仕向けていくことが許されるのだろうか。今後、この技術の応用によって私たちの生き方、そして自然環境まで変わる可能性がある。今、動物を改造する必要があるのだろうか、このことについてこれからも学生と一緒に議論していきたい。

最後に、3期生の入学と同時に担任を受け持って4年、この仕事も3月で終わる。後半の2年間は、就職関係、研究分野の分属、卒論発表の準備など結構雑用があった。生物資源管理学科1学年60名となると、

過去2回卒業生を送り出したが、4年間のお付き合いでも、なかなか顔と名前が一致しない。しかしながら、担任を任されていると、学生と接触する機会も増え、ちょっとしたきっかけから少しずつ名前を憶えるようになった。大変うれしいことであり、今までの卒業生よりも思い出に残りそうだ。

長谷川 博

今年度も修士論文、卒業論文研究の院生・学生とともに「硝酸代謝の遺伝学」、「作物のストレス耐性」、「ヨシの遺伝学」さらに「新しい遺伝資源の開発」を主たるテーマとして取り組んだ。最初の4回生を受け入れてから開始した研究テーマも3年目となり、研究を広げる段階から、ようやく一部は研究をまとめる段階に到達できる見込みになった。2000年7月には近畿作物・育種研究会を滋賀県立大学で開催し、そこで下記の2題の講演を院生に発表させることができた。

大村典子・長谷川博「異なる窒素条件下におけるイネの硝酸還元酵素欠失突然変異体の生育」

山田拓威・吉田貴弘・長谷川博「イネにおける炭素同位体分別の品種間差異」

ヨシの研究は倉茂先生の紹介もあり、北海道十勝のヨシの自然集団の調査が今後行えそうである。環境科学部における育種学のめざす方向として、植物群落の遺伝的保全を考えてきたが、今後は琵琶湖周辺の人間が改変した環境のヨシ群落と十勝の群落の遺伝子の比較などのテーマに取り組む予定である。

研究テーマが進展するにつれて分子生物学手法の重要性を再認識している。環境科学とミクロな分子生物学は一見無関係と思えるが、生物分野では遺伝学のみならず生態レベルから機能の理解まで、今日では分子生物学手法による証明がなくては結論を得ることができない時代になった。環境科学部、ことに生物資源管理学科における分子生物学の教育、研究の充実化を急がねばならないと考えている。

西尾 敏彦

環境科学を学ぶ学生は、植物や動物について、またその栽培や飼育について興味をもってほしいと思っている。したがって、私の担当している卒業研究はもちろん講義や実験、フィールドワークにおいて園芸植物の栽培を何らかのかたちで採り入れている。そのため、去年はこれら作物の栽培管理にかなりの時間を費やすことになった。

たとえば

3月～7月：講義や実験ごとの材料植物の選定、圃場の準備、栽培管理、収穫・調査（春・夏作栽培）

8月～12月：同上（秋・冬作栽培）

通年：ハウス、温室栽培

などである。いずれも学生が自ら栽培管理を行ったり、圃場技師の助けを借りたりしながらのことではあるが、作物栽培のいかに難しいかを示す結果になったものも多い。とくに去年は病害虫による被害も著しく、近年著しく進歩したはずの栽培技術の限界を感じた年でもあった。

8月の出来事：本学人間文化学部の小貫教授によるドキュメンタリー映像作品「四季・遊牧」、および、同教授著「三世代・菜園家族・酔夢譚」との出会いがあった。環境にやさしい農業技術確立を目指して苦戦しつつも毎年堂堂巡りをしている私に思わぬところからの、思わぬ問いかけであった。私の波立つこともない小さい池に、隣の庭から小石が投げ込まれ、小さな波紋となった。

環境にやさしい、環境調和型農業技術を目指すと言いながら、人間優位、自然支配の思想から完全に脱

却できていない自分に気が付いた年でもあった。

新世紀：私にとって、人間と自然の調和が研究対象であり、教育の中心課題であるならば、私自身を今一度見直す必要があるだろう。

泉 泰 弘

省力化を目的としたコムギ・ダイズ二毛作不耕起栽培の圃場試験（3年計画）を今年から本格的に開始した。当初の予想（仮説）と大きく異なる結果が出て戸惑うことが多かったが、その中には偉大な真理が隠されているのではないかと勝手に想像し、それを発見することを夢見ている。また、水田の一部に不耕起移植を採用したが、それだけでは面白くないので、無農薬・無化学肥料の有機栽培を試みた。その際に一番問題となる雑草は、ヘアリーベッチの前作、米ぬか散布、アゾラ（アカウキクサ）投入という3つの手法により、あくまで除草剤を使わずに抑えようとした。場所によって抑草効果にムラが見られ、結果としては慣行栽培よりも収量が少なくなったけれども、安全な米が欲しいという消費者の希望に適った栽培法であるので、今後も継続し改良を目指していきたい。

8月には約3週間、LSSU（Lake Superior State University）夏期プログラムを受講する学生の引率役として米国に出張した。訪米は初めてであったが、小都市での生活の快適さは今まで抱いていた米国（人）へのマイナスの印象（偏見）を覆すに十分なものであった。ただし、今年もまたまたイネの生育のうちで最も重要な時期に水田での調査を行うことができなかつたことが心残りである。

他に3月中旬より1ヶ月間、南米のパラグアイ共和国に出張した。現在、パラグアイでは土地を失った農民の都市部への流出や不法占拠が大きな社会問題となっている。政府は小規模農家の救済には教育水準の向上が緊急課題であると認識している。そこで、JICAの依頼で国内各地の農業高校を視察し、中等農業教育の現状を報告書にまとめた。（出張期間中に休日返上で執筆したが、7万字にも及ぶ長大なものとなった。）パラグアイ訪問は実に11年ぶりであったが、かつて一緒に過ごした村人達と再会した時は感無量であった。

上 町 達 也

昨年度より、アジサイ属植物の系統分類に取り組んでおり、今年度は特に分子生物学的手法による解析に重点を置いた。また岩手県や秋田県のエゾアジサイ自生地の調査を行う機会があり、いくつかの場所でサンプリングも行った。昨年度は滋賀のヤマアジサイ自生地をまわり、葉や花の色や形、さらに草姿の多様さに驚いたが、エゾアジサイはそれほどの多様性はみられなかった。花色もほとんどすべて青色であったが、その青色の美しさは息をのむほどであり、日本人が古くから愛し、また江戸から明治にかけて何人かの西洋人によりヨーロッパに持ち出されたのも頷ける話である。

環境フィールドワークにて学生達とともに、近くの数十名の保育園児とミニトマトの栽培を行い、生きている植物を育てる、生長に関わるという体験が園児達にどのような効果をもたらすかを調査した。園児達の反応も興味深かったが、園児とコミュニケーションをとりながら共同作業を行う学生達の四苦八苦ししている様子もまたおもしろかった。

・ Uemachi, T., and Nishio, T. 2000.

Inflorescence development in Hydrangea macrophylla.

Acta Horticulturae. 515.

265-271.

・ Yamamoto, H., Uemachi, T. and Yazawa, S.

2000. Double-stranded RNA in vigorous-growing lateral shoots emerged

from pepper plants infected with cucumber mosaic virus (CMV). Capsicum & Eggplant Newsletter.

19:89-92.

金 木 亮 一

【論文】 無代かきおよび育苗箱全量施肥栽培水田における流出負荷量の削減、土壌肥科学雑誌71(4)p502-511(2000.8) 無代かきおよび育苗箱全量施肥栽培水田における水稻の生育、収量、食味と窒素、リンの収支、土壌肥科学雑誌71(5)p689-694(2000.10) 琵琶湖の水質保全と新農法、農業土木学会誌68(12)p39-42(2000.12) 代かきの有無および肥料の種類が田面水の窒素・リン濃度に及ぼす影響、農業土木学会論文集211,p29-34(2001.2)

【研究発表】 代かきの有無及び肥料の種類が田面水の窒素、リンに及ぼす影響、農業土木学会大会講演会講演要旨集,p52-53(2000.8) 地域用水の利用状況と水質の関係、農業土木学会大会講演会講演要旨集,p66-67(2000.8) 無代かき・育苗箱全量施肥栽培が水田土壌の理化学性に及ぼす影響、農業土木学会京都支部講演要旨集,p50-51(2000.11) 代かきの有無および土壌の種類などが田面水の濃度に及ぼす影響、農業土木学会京都支部講演要旨集,p52-53(2000.11)

田面水濃度の日変化について 無代かき・育苗箱全量施肥栽培に関する研究(5)、農業土木学会京都支部講演要旨集,p54-55(2000.11) 内湖と循環灌漑施設の水質浄化について、農業土木学会京都支部講演要旨集,p56-57(2000.11) 灌漑期における宇曾川流域の流出負荷量について、農業土木学会京都支部講演要旨集,p62-63(2000.11) 宇曾川流域における水質および負荷量の変動特性について、農業土木学会京都支部講演要旨集,p64-65(2000.11)

【講義・実験実習】 水質管理学 水理学 地域環境整備学 専門外書講読 生物資源管理学実験 環境FW 環境FW 水資源環境論(大学院)

【各種委員】 農業土木学会農村計画研究会幹事 みずすまし構想推進委員会委員 「竜王南部地区」水質保全対策事業技術検討委員 新湖北地区地域用水検討委員 児島湾周辺地域調査検討委員など。

小 谷 廣 通

論文・発表

「無代かきおよび育苗箱全量施肥栽培水田における流出負荷量の削減」(共著)、日本土壌肥科学雑誌第71巻 第4号、pp.502-511(2000)。

「熱収支フラックス比法による水蒸気フラックスの推定」(共著) 農業土木学会論文集 掲載予定。

「熱収支フラックス比法における温度差補正について」、農業土木学会大会講演要旨集、pp.316-317。

研究経過

渦相関法によって測定した顕熱フラックスを基準にして他の気体フラックスを推定するフラックス比法

と熱収支式を組み合わせ、これを熱収支フラックス比法と名づけた。この方法によって地表面-大気間の水蒸気フラックスは、比較的正確に測定でき、空間的平均値が得られ、長期連続測定が可能であることを明らかにした。

熱収支フラックス比法は2高度の温度差が補正できるので、水蒸気およびそれ以外の気体フラックスが測定できると考えられる。そこで、誤差伝播の法則を用いて温度差と湿度差を補正する方法を提示した。また、乾球温度差と湿球温度差の補正値の度数分布はほぼ正規分布となることがわかった。

講義

測量学、 土壌物質移動論、 応用気象学、 測量実習、 環境フィールドワーク 、 環境フィールドワーク 、 生物資源管理学実験 。

増 田 佳 昭

主な著書・論文

増田佳昭「協同組合における組合員の経営参加」、山本修・吉田忠・小池恒男編著『協同組合のコーポレート・ガバナンス』、家の光協会、2000年9月。

増田佳昭「新基本法下の農協と行政 - 問われる棲み分けと連携」、『農業と経済』第66巻第12号、2000年9月。

増田佳昭「広域合併農協と一国二制度 - 『多様性』を許容できる農協組織試論」、『協同組合経営研究月報』No.561、2000年6月。

主な対外活動

滋賀県・近江こだわり農産物発信事業推進委員会・会長

滋賀県野菜流通対策協議会・会長

地域農林経済学会常任理事（2000年10月～）

近畿農協研究会運営委員（2000年5月～）

2000年7月に本学交流センターにて、地域農林経済学会近畿支部会が開催され、座長をつとめた。テーマは、稲作における法人経営の現状と課題を中心とするもので、県内の代表的法人経営の事例報告を得て、参加者にとって大いに勉強になる研究会となった。

10月には、東京で開催された日本協同組合学会大会シンポジウム座長をつとめた。また、12月の近畿農協研究会大会では、大会報告を行った。

学 生 活 動 報 告
